

スピーチ講座第2回 言葉を効果的に届けるための表現方法

NADE九州支部事務局長・アナウンサー

加地 良光

ディベートにおけるコミュニケーションの目的は、自分たちの主張を、聴衆の代表であるジャッジに正確に伝え理解してもらうことです。自分のすべての主張を伝えたいとばかりに大きな声で突き進んでいくスピーチに時々出会います。しかし、元気に頼もしさを感じる一方、残念ながら、本当に大事な点がどこにあるのか伝わらないということになってしまうことが少なくありません。文書を読み上げて正確に内容を伝える、ディベートの場合には、フローシートにしっかりと痕跡を残してもらわないといけません。そのためには、スピーチでめりはりを作る、大事な点を強調する表現方法について今回まとめてみました。

●表現技術を知る

表現技術には、強弱・高低・緩急・間・トーンなどがあります。文章を読むときの基本的なテクニックは、緩急と強弱です。単純に説明すると、ある語句を強調したいときは、ゆっくり、あるいは強く、さほど重要でないときは、はやく、あるいは弱く、話すということです。アナウンサーは、伝えたい言葉を相手に確実に届けるために、さまざまなテクニックを使いながら、表現の工夫をしています。

●強調する技術を学ぶ

「強く」あるいは「高く」発音したり、「緩急」や「間」などによって特定の言葉を際立たせる技術を使うことで、表現のバリエーションを広げることができます。

①強弱—特定の言葉を強く読むことで、その部分を強調します。

たとえば、「日本一の山富士山」この文章を強調するテクニックにより、3つの意味での読み分けができます。わかりますか？

まず、「日本一の」を強調してみてください。意味は、日本一の山は富士山であって、日本で二番目でも、三番目でもないですという意味になります。次に、「山」を強調してみてください。そうすると、日本一の山は富士山で、富士山は川でも、湖でもない、山の日本一ですということを示しま

す。最後に、「富士山」を強調してみてください。どうなるでしょうか？日本一の山は富士山であって、高尾山でも阿蘇山でもありませんということになります。

簡単な一つの文でもこんなに表現を豊かにできることをまず意識して下さい。

では、例題です。「私はこの絵が好きです」という文章を3つの強調で読み分けをして、意味を考えてみましょう。

私はこの絵が好きです…

この絵が好きなのは、私なのだという強調

私はこの絵が好きです…

私が好きなのは、この絵なんだという強調

私はこの絵が好きです…

私はこの絵が、好きなんだという強調

②高低—特定の言葉を高い声で読むことによって、その部分を強調します。下線部を高く読んで強調してみましょう。

私はこの花が好きです

高さがわからないという人は、高低を、差し出した手を上げ下げながら読んでみて下さい。

③緩急—わかりにくい言葉や、特に伝えたい数字やキーワードなどをゆっくり読むことで強調します。とくに、証拠資料などで提示するデータは、判定の鍵をにぎる大事なポイントになります。ゆっくりと、数字を書き取って下さいという気持ちで読み上げないといけません。この気持ちが大事なのです。言い放っておけば、何でもフローシートに残してくれると思ったら痛い目にあいます。

次の文章の3つの数字を聴衆に書き取ってもらうつもりで、ゆっくりと読んでみましょう。

2000年6月の衆院選挙での全体の投票率は、62.49%でしたが、60歳代後半が80.09%だったのに対して、20歳代前半では35.64%にとどまっています

●「間」を身につける

スピーチをしていて「間」の重要性がわかっている人と、わかっていない人ではそのスピーチの質に大きな違いが生まれます。「間」には、息つ

ぎの「間」・言葉の切れ目の「間」・意味の違いの「間」などがあります。

① 切れ目の「間」

切れ目の「間」はもつともなじみの深い句読点。

学校の友達が来ました。(間) その友達はスポーツが得意です。

何回も電話をしましたが、(間) 彼女は出かけて留守でした。

② 意味の違いの「間」

「間」取り方を間違えると、大変な誤りとなるので注意しないとけません。意味の違いを考えて読み分けをして下さい。

きれいな(間) 花と花瓶

きれいな花と(間) 花瓶

美しい(間) 庭の桜

美しい庭の(間) 桜

次の文はどう読みますか？

「アメリカとイギリスを除くヨーロッパ各国は」正しくはアメリカと(間) イギリスを除くヨーロッパ各国は、と読まないといけません。

ディベートでは、必ずしも自分が書き上げた議論を読むわけではありません。チームメイトが書いた文章を使うときは、こうした「間」の取り方を間違えると、正しく主張が伝わらなくなってしまいます。注意しましょう。

ところで、たくさんの情報を伝えた後は、一休みという「間」は素人の「間」です。スピーチの達人の「間」は、必要なタイミングで絶妙な長さの小休止を、意図的にとる、居合道のような空間を作ることにあります。スピーチの情報量を上げることにはならないけど、情報を消化することにつながる「間」が大事なのです。

相手の理解を促したいとき、その場面の直前や、直後に「間」を入れるのです。直前ならば、聞き手の関心を引く効果、これから大事なことを言いますよ、いいですか？という空間になります。また、直後には、今言ったことわかりますか？と相手が情報を理解し、それを整理する時間になります。伝えたいことの重要さが伝われば、ジャッジは一生懸命にペンを動かしてくれるでしょう。待てずに、あわてて次の情報を伝えようと、相手はそのメッセージを投げ出すか、新たな情報を取り入れることをやめるかしかありません。

では、間をとるときにどうすればいいのか？小学生の朗読のように、「、」は0.5秒、「。」は1.0秒休むというような機械的な方法はあまり良

い方法ではありません。間を置くところでは、聴衆に「ですからね」とか「いいですか」と話しかけるつもりで、一瞬、声に出さずに心の中で言うようにします。

たとえば、()の中は声を出さずに読みます。一全国のコンビニエンスストアでは、女性や子どもの駆け込みが半年に(すごい数ですよ)5000件以上あるそうです。

一義務はあるのに権利がない、働いて税金を払っているのに、選挙権や被選挙権が与えられていないのは不公平です(そう思いませんか?)。権利を与えられるのは当然のことです。

●トーンがそれらしい雰囲気 연출する

アナウンサーは番組内容によって、声の雰囲気を変えます。その要素としては、「明るさ」「元気のよさ」「落ち着き」などがあります。低い音でも明るい雰囲気は出せますし、高い音でも落ち着いた雰囲気を表現することはできます。ニュースを例にとると、政治経済、季節の話題、スポーツ、事件などそれぞれトーンが異なります。政治経済は「落ち着き」なら、桜の開花は「明るさ」、スポーツは「元気良さ」「さわやかさ」とトーンを使い分けます。それも、前のニュースが終わったあとの、接続詞「次に」「さて」などのタイミングで、瞬時に表情とともに、次のニュースのトーンへ変化させていきます。こんなトーンも意識しながら表現を豊かにしてほしいものです(ただし、あまりに芝居がかったような過大表現はかえって聴衆に信憑性を失わせることになります)。

●速さとメリハリで場を制する

ちなみに、アナウンサーは、1分間に400字程度の原稿を読みます。ゆっくりと話していると感じるのが250~300字ぐらい、まどろっこしさを感じるのは200字ぐらいです。聴衆が素直に情報を受け止められるスピーチの速さの基準を決めながら、めりはりをつけていきます。

強調すべき点、とくに大事な数字などについては、マーカーで色をつけておくか、文字を大きくしておく、強調しなければいけないと気持ちを入れる意識が持てます。そこで強調のテクニックを用いてみましょう。

「強弱」「高低」「緩急」「トーン」さまざまな表現方法を意識して、メリハリを利かせたスピーチ、とくに絶妙な「間」でジャッジの理解を引っ張っていく…一瞬の時間「間」が勝利の「間法」となります。